



79の悲劇

1945年7月19日、福井空襲が起こった。約1500余りの人が亡くなり、23000軒が焼夷弾によって焼けた。焼夷弾は全部で9000発、約1000トンが投下された。地上に残っていた人は、地下の防空壕に避難した。しかし、防空壕の中は、火事の煙が入ってきて息苦しくなり、辺りの熱がこもっているため、中で体調不良を訴える人もいた。市民たちは、日頃からバケツリレーの練習をしていたが、焼夷弾の火の勢いは止まらず、多くの人が亡くなった。防空頭巾や火たたきを使って消火しようと頑張っている人もいたが、もうその時には、もう人の手におえる火事ではなくなっていた。

幕末に活躍した人たち

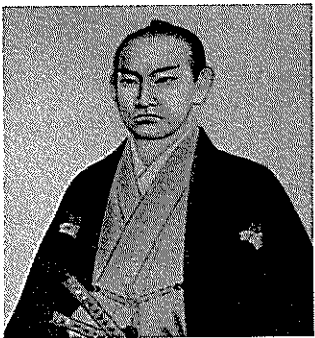
日下部 太郎

- ・福井藩で初めての留学生。
- ・留学先のアメリカで、素晴らしい成績を取り、ゴールドキーが贈られる。

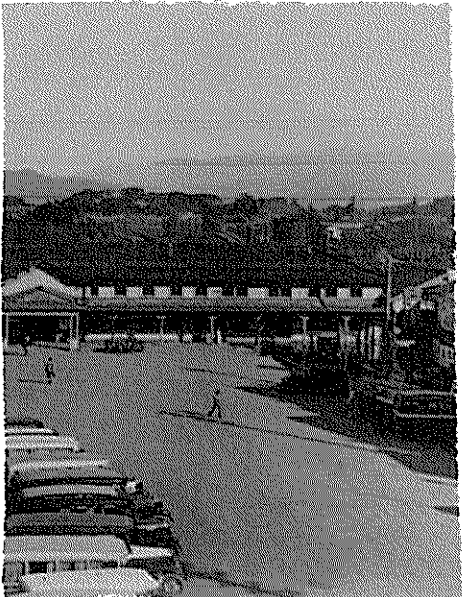


橋本 左内

- ・当時の学校のやり方を変えた。
- ・「志を立てる」や「学問に励む」などが書かれた「啓発録」を出版する。



空襲前後の様子



↑空襲前の福井の様子

空襲前の福井は、学校や郵便局、さらには親戚、鉄道も通っていて、現代に近い技術を持っていた。学校では、卒業証書ももらっていたそうだ。空襲から3年がたち、人々の生活も安定してきていた。しかし、そこで福井地震が発生し、また1から町づくりを見直すことにした。例えば、道を広くして、車が通りやすく、火事が広らないような工夫をした。結果、町は無事復興し、人口も、空襲、地震前よりも増えることになった。人々は、何度も復興する姿が、まるで死んだ後、灰から生きかえる「フェニックス」のようだと考え、「フェニックス通り」と名づけた。

残された家族



一家の大黒柱である父親が戦争で亡くなり、残された家族はどうやって生活しようかと頭を抱えていた。母親は、母子寮に子どもを預けたり、慣れない仕事をして子どもを育てようとしている人もいた。そんな母親を見ていた子どもたちは、少しでも母親の苦勞を減らしたいと考え、長男は「新聞少年」、長女は「小さなお母さん」になった。父親がいないからこそ、家族は助け合い励まし合って生活した。

編集後記

たくさんの方からいろいろなことを教えてもらって、新しいことが知れました。この新聞に全て書ききれないのが悔しいです。新聞を作るのは大変だし、時間もかかるけど、終わったときの達成感や自分の知ったことが他の多くの人に知ってもらえるのがとても嬉しかったです。読んでくれてありがとうございます！